

# プユマの雨乞い

蛸 島 直

## はじめに

プユマは台湾東南部台東市及びその近郊に生活する先住民族である。かつての彼等の農業は天水への依存度が高く、旱魃が長期化した際には雨乞いの儀礼 *PaHudal* が行なわれていた。しかしながら、作物の変更や揚水施設の導入等によって現在、この儀礼は行われていない。カティプル村 (Katipul, 知本村) では、1998年の8月に40年ぶりに雨乞い儀礼が実施されたが、農業上の必要からではなく原住民運動の一環としての開催であった。筆者は知本村の隣村カサヴァカン村 (Kasavakan, 建和村) で民族誌学的調査を行っているが、村人たちが回想・記憶する、かつての雨乞い儀礼とその背景について文字化しておくことは研究者にとってのみならず現地の人々にも意味のあることと考える。同村では、1965年を最後に雨乞いは行われていないが、この儀礼は、人々の気象や地理に関する知識、世界観や、祖先観念を理解する手がかりを秘めているようにも思われる。

以下、農耕暦と雨量、雨乞いの実施準備、儀礼内容、目的地等について記述し、最後にこの儀礼の背景や変化について簡単な考察を加えたい。なお、過去の習慣についての記述であるので、調査の方法は観察を伴わず、聞き取りのみで行われたことをここに明記し、慎重に記述を進めていきたいと考える。

## I 農耕暦と雨量

### 作物と農耕暦

近年のプユマは、若者を中心に農業離れが進行しているが、かつての生業形態は、焼畑による粟、サツマイモ、タロイモを主とした農業に狩猟を伴うものであった。19世紀末には漢人との接触により水田耕作を開始し、日本統治の開始後は水稻栽培が奨励され、カサヴァカン村の場合、1917年頃より1930年にかけて整備された用水路により安定した稲作が可能となり、その比重を増している。とはいえ、最も重要な作物は粟 (*dawa*) だとされ、粟をめぐるはいくつかの伝承や禁忌 (*parisi*) がある。粟は、祖先の発祥地ルヴォアハンにいた一人の男が蘭嶼島から自分の性器の中に隠し持って来た

[表1] カサヴァカン村主要作物の農耕暦(1950年代)と収穫祭

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
粟	播種	播種				収穫	収穫					
陸稲	播種					収穫	収穫					
水稲：一期		田植	田植			収穫	収穫					
水稲：二期							田植	田植			収穫	収穫
サツマイモ	植付	植付	植付						植付	植付	植付	
タロイモ		植付	植付							植付		
	▶ 冬期 収穫祭						◆ 夏期 収穫祭					◀ 冬期 収穫祭

いう伝承があり、収穫に際しては、東の蘭嶼島やその他の祖先に関係する方向に向かって粟を分配する儀礼が行われている [蛸島2007: 82]。日常粟を食べることのなくなった今日もなお、「粟を作らなければ祖先が怒る」ともいわれている。なお、粟は年2回の栽培が可能である。しかしながらカサヴァカン村では、それは禁忌とされ、年1回のみ栽培・収穫されてきた。

[表1] はカサヴァカン村の1950年代の主要作物の農耕暦と収穫祭の時期を示したものである。同村では、アミアン (*Hamian*) と呼ばれる収穫祭が年2回行われている。7月の粟の収穫に際しては夏期収穫祭クマドゥルナン *kumaderunan* が、12月の水稲 (*sampuy* と呼ばれる品種) の収穫に際しては冬期収穫祭カティキドゥワナン *katikiduwanan* が行われている。ともに、粟あるいは水稲の新穀を祖先に分け与えるデミラッ (*demiraH*) 儀礼によって開始されるが、冬期収穫祭では巨大なブランコ *tikudawan* が建設され、少年組による「猿祭り」 *magayagayau* その他いくつかの儀礼要素を伴い、非常に賑やかな祭典となっている。一方の夏期収穫祭は近年ではデミラッ儀礼のみで済まされる年度もある。しかし、年配の口述者たちによれば、彼らが「粟祭り」と訳す夏期収穫祭の方が儀礼的重要度が高い (*parisian*) という。

さて、本題の雨乞いが行われたのは、その粟の栽培期間中であつた。焼畑は早いものは12月から準備され、1月から2月にかけて粟撒きが行われる。粟とほぼ同時に、サツマイモ、タロイモ、陸稲、アカササゲ、カボチャなど多くの作物が植付けあるいは播種され、1か月ほど遅れて *uliyava* という品種名の一期作の水稲の田植えが行われる。3月には粟の間引きと除草を行い、6月から7月にかけて粟が収穫され、他の作物もこれに続く。雨不足をもっとも怖れるのは天水に100パーセント依存するこの粟の成長期

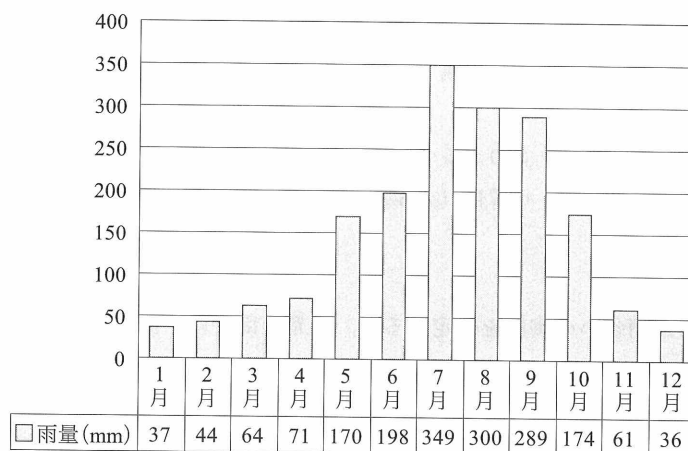
間中である。8月にはほぼ収穫が完了しているので台風による粟の被害の心配は少ないが、播種から1, 2か月後の3月, 4月の早魃 (*Hamnin*) はもっとも深刻であった。

### 雨量

[グラフ1] に現在カサヴァカン村が組み入れられている台東市<sup>(1)</sup>の月別降水量を示したが、3月, 4月は乾期に当たり、毎年のように雨不足が懸念される時分であった。『台湾地誌』によれば、台東市の雨期は、5月第1週に始まり10月の第3週までの約162日に及んでいる。雨期と乾期の雨量の相違は非常に大きく、5月から10月までの6か月間の総雨量1480mm に対し、11月から翌年4月の6か月間の総雨量は313mm に過ぎない。ちなみに同じく台湾東部の花蓮市(台東市より北北東に約140km)の同期間の総雨量は553mm であり、台東のそれはその半分に近い数字ということになり [陳正祥 1961: 1213], 早魃の危険が高いことが理解される。

農耕のサイクル上、最も雨が期待されるのは3月から5月にかけてであるが、この期間中に連続して雨が降ることをカウダダン *kaHudadan* と呼んでいる。*kaHudadan* とは *Hudal* (雨) を語根とし「本当の雨」という意味である。その反意語ともいえるのが、人々の恐れる *Hamnin* (早魃) である。*kaHudadan* と *Hamnin* は、先述のような気象統計学的意味での「雨期」「乾期」とは期間と意味を異にしていることはいうまでもない。

雨乞いは粟の播種後に早魃となった場合に行われ、2月から6月までの間、とくに3月, 4月に多く、稀に7月に行った年もあったと記憶されている。カウダダンとなることが期待される3月, 4月の雨量は、1月, 2月より漸増するものの、依然として乾期であり、さらに5月に至っても早魃が続くことが稀ではない。それゆえ、村人たちの記憶では、ほぼ毎年雨乞いが行われ、行わなかった年度の方がむしろ稀であったという。主



[グラフ1] 台東市の月別雨量

陳正祥 (1961: 1213) より作成。

として粟の成長と枯れ具合を見ながら、村人たちが相談して雨乞いの実施を決めたという。

## II 雨乞いの実施まで

### 主導者

プユマにおいては男子年齢階梯制が発達し男子集会所 (*parakuwan*) が集落の運営に大きな役割を果たしていた。プユマの諸集落の中には、一集落で複数の首長家と集会所を有する集落もあるが、カサヴァカン村の場合、一集落一長家・一集会所という形態が続いてきた。唯一の首長家の名称はドゥマラダス (*dumaradas*) 家で、同家が唯一の集会所を管掌していた。そこでは、*mevararisun* (ほぼ14~17歳)、*vangsaran* (ほぼ17歳~結婚まで)、そして少数ながら *inavangul* (離婚中の男性) が寝起きを共にしていた。なお、ほぼ10~13歳の少年は *takuvakuwan* と呼ばれる少年組に加入していた。男子集会所は、政治、軍事、集落祭祀の中心でもあり、男性長老たちが毎日のように立ち寄り、大きな問題があれば首長 (*ayawan*) の判断と命令を仰いだ。雨乞いは集落を単位とする重要行事であり、男子集会所前の広場を出発点としていたが、意外なことに、それは男子集会所の管轄外であった。そこには3つの理由があるように考えられる。第一に、雨乞い儀礼の拠点となるカルマハン (祭屋) が首長家のそれではなく、アドックと呼ばれる他のカルマハンであることが指摘されよう。このカルマハンは「雨のカルマハン」とも呼ばれ、その祭主が雨乞いや雨を止める儀礼を主宰していた。第二に、粟の栽培においては男子よりも女子の関与や関心が大きかったことが挙げられよう。粟栽培の各過程では、サライパン (*saraipan*) と呼ばれる労働交換の集団が結成されるが、それを構成するのは女子が大半であった。第三の理由は、雨乞い行事において主要成員として活躍するトゥマララマオ (*temararamao*: 巫師) たちが女性だということである。ムリヴリブック村から婚入した一人の男性<sup>(2)</sup>を除いてはカサヴァカン村の巫師は全員が女性であった。

雨乞いの実施は、アドックのカルマハンの祭主と巫師トゥマララマオたちを中心とする長老たち (*dawadawan*) や首長 (*ayawan*) が粟の様子を見ながら相談によって決定されたという。

### 通知

主導者たちが雨乞いの実施を決定すると、実施の前日に、伝令 (*talukus*) が全村に、あるいは隣組の範囲でそれぞれの隣長 (*kushuu*) が、翌日雨乞いに出かける旨を知らせて歩いた。隣組や隣長は日本統治時代に設置され、今日も継続されている。現在は19組を数えるが、以前はその数は少なかったという。伝令は村に一人おり、タウパスという名の男性が伝令を務めていたことが記憶されている。彼は先述した唯一の男性トゥマララマオでもあり、竹占 (*maHadao*) を行っていたことから、*maHadao* という渾名で

知られていた。伝令は、「ノー、ノー (掛け声)、西、東、北、南の人たち、明日雨乞いに行きますよ」(*nohoh! nohoh! makadaya, makaraud, makaHami, makakedet, Hemanan yawa-ta paHudal da*) と大声で知らせて歩いたという。

### 参加者

雨乞いは、水路補修と並んで集落全体による共同労働 (メサウル) であった。首長、雨のカルマハンの祭主、トゥマララマオたちといった主導者たちに加え、一般の村人たちが一軒から一人参加するというのが原則であった。主導者たちの家ではすでに一人、場合によっては二人 (首長の妻がトゥマララマオである場合など) が参加していることになるので、彼 (女) たち以外の家族が参加するかどうかは任意であった。

雨乞いは行き先を毎日かえて数日間にわたって行われるが、一人でも多くが連日参加することが期待されていた。とはいえ、人手の足りない家では、負担も大きく、実際には全期間を通じて一家族から最低一人一日のみの参加で許されていたようである。首長でさえも連日参加するとは限らなかった。どうしても参加者を出せない家庭では、代償として金を出すこともあったが、それも任意であった。こうして、一日あたりの参加者の総数は20名~40数名の間であったという。雨乞いが7日間行われたとすると、延べ参加者数は、7をかけて140名から300名程度ということになる。これに対し、1940年代のカサヴァカン村の世帯数は約200であるので、「一家族から一人一日のみ」の参加が大方を占めていたものと考えられる。

年齢の構成は多様であるが、これには、時代差が認められるようである。1920年代から1930年代生まれの口述者たちの記憶では、女性は14歳くらいからの *vuravurayn* (娘) が参加していたものの、男子については同年齢の *mevararisun* (ほぼ14~17歳) や *vangsaran* (ほぼ17歳~結婚まで) は参加しなかったという。先述のように、雨乞いは男子集会所の管轄外だったのである。ところが、1948年生まれの口述者による1960年代の雨乞いでは、男女ともに、国民学校を卒業した13歳頃から参加していたという。*mevararisun* や *vangsaran* も参加するようになったのである。実は、カサヴァカン村の伝統的な男子集会所は1958年に取り壊され、この時点で男子年齢階梯制は崩壊している。とはいえ、その後も、*mevararisun* や *vangsaran* という年齢層を指す呼称は存続している。彼等青年たちは、集会所という居場所を失ったことから、以前は管轄外であった雨乞いに参加するようになったのだろうか。その背景については後に再考してみたい。

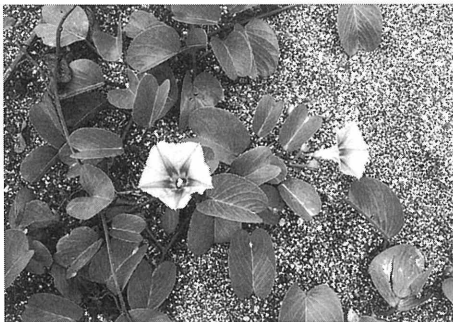
### 服装

雨乞いの参加者たちは男女ともに伝統衣装を着て参加することが期待されていたが、1950、60年代には伝統衣装を着る者の数の方が少なかったという。1960年頃には地下足袋や靴を履く者もいたが、以前はみな裸足であった。以前の道路は砂利道が多かったので、太陽熱で高温となり、足の裏が大変暑かったという。足に怪我をすることもあった

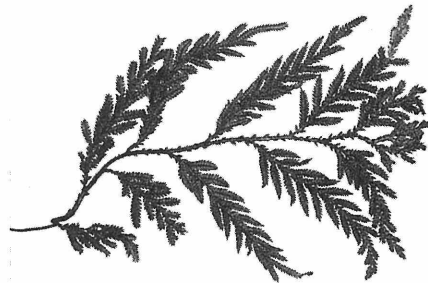
が、なかには、工夫して檳榔樹の葉鞘 (*tavai*) を足に縛りつけ靴のようにする者もいた。

また、どんなに暑くても笠 (*karipan*) を被ることは許されなかった。祖先が笠を見るのを嫌がり、雨を降らせてくれないのだともいう。笠を被ると主導者たちに叱られたが、植物で編んだ被り物 (*HapuT*) は許された。*HapuT* は「花」の意味でもあるが、花や草を輪のように編んだ被り物も *HapuT* であり、草だけで編まれたものも同名で呼んでいる。センダン (*hamut*) やタイワンニンジンボク (*sangriw*)、カタン (*TuHeR*)、ヌルデ (*talikutik*) の葉などを編んだが、とくにセンダンは葉が長くて編みやすいうえに良い日除けになる。植物が含む水分も暑さを押さえてくれたが、目的地に着くころには乾いてしまう。各目的地では、その土地の特色的な花や草を用いて再び被り物を作った。儀礼を終え、弁当を食べてから被り物を編むのを楽しんだ。帰路は午後の日差しでとくに暑いので、大き目に作って顔を隠し、日差しを防いだ。

初日の目的地は祖先の発祥地であるルヴォアハンであった。ここは海岸に面しており、砂浜に這う *kavuRasiRasi* (グンバイヒルガオ) を編んだ [写真1]。グンバイヒルガオは、美しい花を咲かせ、芋蔓のように海岸を這い、早魃の時も枯れることがない。ちなみに *kavuRasiRasi* とは「サツマイモのような」という意味である<sup>(3)</sup>。また、その後の目的地の一つ、アリウンヴンでは平地では見られないシダ植物 *sazaisai* (全縁卷柏: *Selaginella delicatula*(Desv.)Alston) を取って復路の被り物に編んだ [写真2]。



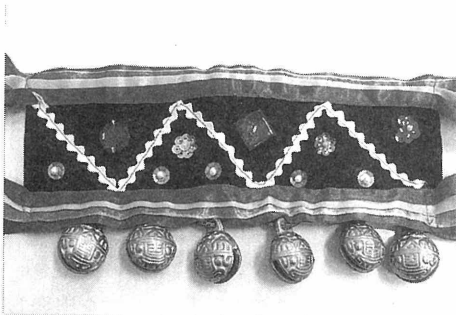
[写真1] グンバイヒルガオ



[写真2] サザイサイ (全縁卷柏)。アリウンヴンにて

### 鈴, 鉦

女性は鈴 (*kamulin*) を、男性は *tawdiHul* と呼ばれる鉦を鳴らして行進する。*kamulin* は直径 3 cm ほどの鈴で、これを多数つけた帯状の腰当てを、鈴が背中側にくるように着用する [写真3]。*tawdiHul* とは、赤く彩色された長さ 30cm 前後の木の人形状の台座に 17cm ほどの長さの筒状の鉦 (*takudan*) を括りつけたもので、鉦の中に麻紐で吊るされた鉄の振り子 (*puadak*) が当たることによって音を発する仕組みになっている [写真4]。通常は、これを背中側の帯に挿して腰に着けるが、雨乞いの場合にはそうする者



[写真3] 鈴 (カムリン) を付けた帯状の腰当

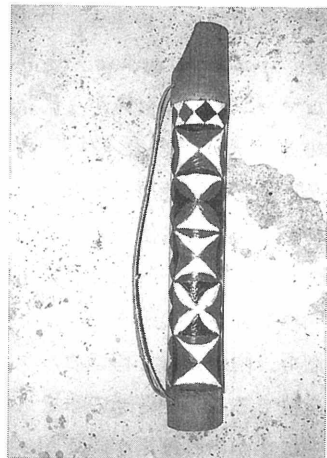


[写真4] 鉦 (タウディウル)

に加え、手に持って行進する者もいた。手に持つ場合は、紐をほどいて振り子を右手に持ち、左手に持った本体を叩いた。通常、*tawdiHul* は男性のみが使用するが、雨乞いに限っては、女性が *tawdiHul* を身に着けることもあった。また、*tawdiHul* の代わりに牛の鈴を手にする者もいたという。人々は雨乞いの行列の音を、キャンキャンキャンという鈴の音と、カリンコロンカリンコロンという *tawdiHul* の音で形容している。ある口述者は、音を鳴らすことによって、祖先に雨を要求するのだと説明している。その他、一部の村人の記憶では、1950年前後の雨乞いでは集会所にある *patingtigang* という直径数10cmの大きな鉦を持ち出していた。これを木の棒に下げて男性二人が担ぎ、後ろの方が行進のリズムに合わせて叩いたという。

### 竹筒

参加者の全員が手にするのが *vatukuHung* と呼ばれる竹筒である [写真5]。刺竹 (*kawayan*) を用いて作り、上の方の節に小さな穴を開け、全体に藤で編んだ把手が付けられる。赤白黒の3色の模様を描かれたものが多い。大きさは様々だが、雨乞いには長さ40cm前後、直径6cm前後の比較的小型のものが用いられた。大きなものは重くて負担が大きいという。目的地では *vatukuHung* に水を汲み、参加者が互いに水を掛けあった。*vatukuHung* は刺竹の先端側の一節分の長さで作られるが、これとは別に、根元の方の二節で作られた *tudung* という竹筒がある。長さは1mを超え、肩に載せて運搬した。これは参加



[写真5] 竹筒 (ヴァトゥクン)

者たちの途中での水の補給用に若者が担いだ。

雨乞いには各自が昼食用にサツマイモや粟飯の弁当を持参した。若者は風呂敷 (*hinpuh*) で包んで腰に巻き、年配女性は肩から下げる籠 (*parkan*) に弁当を入れた。各目的地で儀礼を終えてから昼食を取った。

### III 雨乞いの儀礼内容

カサヴァカン村の雨乞い (*PaHudal*) は次のような手順で行われていた。まず、雨乞いに関係するアドックのカルマハン (祭屋) で、その祭主や巫師たちが祈禱する。続いて、パラクワン (男子集会所) でその日の参加者たちが合流し、揃って村を出発し鉦や鈴を鳴らしながら駆け足で目的地を訪ねる。目的地で祈禱をして後、水を汲んで掛け合い、同様に駆け足で集落に戻ってくる。カルマハン関係者たちはさらにカルマハンで儀礼を行う、といった手順である。目的地は数カ所あり、一日に一か所を原則とし、数日間これを繰り返したのである。以下、雨乞い儀礼の進行について記述していきたい。

#### ① 雨乞いのカルマハンにて

カサヴァカン村には、雨のカルマハン (*karumahan na Hudal*) あるいは雨乞いのカルマハン (*paHudal na karumahan*) と呼ばれるカルマハン (祭屋) がある。そのカルマハンの名称はアドック *adok* (古くは *padok*) であったが、その名を記憶する村人は数少なくなっている [蛸島2000: 88-89]。その祭主は、Adok (Padok) (女) → Arunivai (女: 1876-1939) → Ujojo (男: 1899-1971) → Angot (男: 1927-1986) → Ikitsu (男: 1952) の順に継承されている。ウジョジョ (Ujojo) の代まではその祭主が雨乞いや雨を止める儀礼を主宰していた。カサヴァカン村は一集落一酋長家の状態が続いているが、ウジョジョは、「雨乞いの酋長」(*paudal na ayawan*) と呼ばれることもあった。カルマハン内には祖先から代々伝えられたとされる高さ40センチほどの壺 [写真6] が祀られている。この壺を雨乞いに使用したのである<sup>(4)</sup>。なお、このカルマハンには瓢箪も伝えられ、同じく雨乞いに用いられていたというが、現在は行方不明となっている。



[写真6] 雨乞いに使用されるアドックの祭屋の壺

ウジョジョの娘タツコによれば、雨が降るとこの壺をカルマハンの外に出し、雨水を溜め、雨が止むと再びカルマハンに収めなければならない。禁忌もたくさんあり、雨水を捨てることや普通の水を入れること、太陽に長く当てることが禁じられている。壺の中に水があれば雨が降るが、水がなくなると雨が降らず早魃になるという。

雨乞いは早朝に、祭主と酋長、そしてトゥマラマオたちがこのカルマハンに集まるこ



とから開始された。壺を外に出し太陽に当てると雨が降るといわれている。ウジョジョが儀礼を行ったが、壺を外に出すこと以外の儀礼内容は不明である。なお、ウジョジョの母アルニヴァイは雨乞いとともに、この壺を用いて大雨を止めることもあったとタツコはいう。ウジョジョの没後、このカルマハンの通常の祭祀、すなわち年2度のデミラツ儀礼は継続されているが、積極的な雨乞いはなされていない。とはいえ、村人たちはこのカルマハンやウジョジョの靈験を記憶している。1995年の7月は雨が少なかったが、「あの壺を外に出せばよいのに」という村人たちの声を耳にした。また、1992年の8月には台北の国家戯劇院にて「台湾原住民族楽舞シリーズ：プユマ篇」が開催され、2日間にわたって各集落の代表者たちが様々な伝統文化を披露した。そのフィナーレは中正記念公園での輪舞であったが、大雨が降り止まず中止になるかと思われた。同行していたトゥマラマオのロヴァンは、先代首長のアハダウとウジョジョの靈を呼び出し、「雨を他所にそらしてくれるように」祈願した。間もなく雨が止んだが、村人たちは、ウジョジョたちが願いを聞き入れてくれたのだと語っていた [同：93]。

アドックに比べると村内でも知名度が低いが、もう一つアルカルマン (*Arukaruman*) という名のカルマハンがある。こちらもその名を知る者は僅かで普通はその祭主イワの名で呼ばれている。1921年生まれの世界によれば、旱魃の際には、アドックと「イワのカルマハン」、それぞれの祭主が相談してそれぞれの祭屋の扉を開けたという。アルカルマンのカルマハンの中には発祥地ルヴォアハンから伝えられたという高さ1.5mほどの細長い石が祀られている [写真7]。この石は太陽に当ててはならないとされる一方で、石に水をかけると雨が降るといわれ、祭主が雨乞いを行っていた。なお、アドックとアルカルマンではともに雨乞いだけではなく雨を止める儀礼も行われていたが、これについては後に触れることにしたい。



[写真7] アルカルマンの祭屋の石。祖先発祥地から伝えられたという

## ② パラクワンにて

アドックのカルマハンでの儀礼を終えた祭主・首長・トゥマラマオたちは男子集会所 (*parakuwan*) 前の広場に移動する。ここには他の参加者たちが集まっている。ここからその日の目的地に揃って出かけるが、出発前にトゥマラマオが集会所で *parisi* (儀礼) を行った。住居、靈屋、集会所を問わず、建物に入って右側中央の柱はリンスウカン *ringsukan* と呼ばれ、祖先靈が宿るものとされている。トゥマラマオが集会所のリンスウカンに鉄片 (*tinan*) を撒いて、これから出発する旨祖先に報告するのだという。なお、通常は男子集会所への女子の立ち入りは禁止されているが、雨乞いや収穫祭

期間中は、女性であるトゥマララマオの立ち入りが許された。

### ③ 行進

雨乞いは隊列を組み駆け足 (*humiduhil*) での行進となる。参加者の人数に応じて1列乃至3列に並んだが、2列のことが多かったという。脚の速い男性が先頭側、女性が後ろ側につき、とくに仲の良い者が固まって走った。女性であってもアヴォクル (トゥマララマオの長) が最先頭に立ち、駆け足の速度を決定することになったという。とくにアパンというアヴォクルは年齢にかかわらず先頭を走り、一行を上手に率いていたという。行進は往復共に駆け足であった。参加者には体力、脚力の差があるので、脚の速い男性たちは、足踏みをしたり、遅れている年寄や女性を迎えに戻ったりして速さを調整した。すなわち、「の」の字を連続させたような形で走ることになるが、首長のハコによれば、以前は首狩りの習慣があり、落伍した年寄が首を取られないように守る必要があったからだという<sup>(5)</sup>。日によっては往復30kmを超える行程となり、駆け足での往復は参加者の体力を大いに消耗させ、とくに年寄りには厳しいものがあった。しかしながら、儀礼に精通した祭主、トゥマララマオ、首長たちの参加は不可欠であり、自転車が普及しだしてからは彼等が自転車に乗ったり、あるいは中年男性が彼等を乗せて自転車を漕いだという。とはいえ、雨乞いは駆け足 (*fumiduhil*) が原則であり、若者が自転車に乗ろうとすると「意味がない」といって主導者たちに叱られたという。

### ④ ヴィニリン

目的地に着くと、まず先にトゥマララマオたちが *vinilin* と呼ばれる儀礼の手続きをとる。*vinilin* は雨乞いに限らず様々な儀礼の開始前に行われ、その土地付近の死霊たちが儀礼の邪魔をしないように道端で祈るものである。他集落やその近くを訪ねての儀礼の場合には、当該地の歴代首長たちへ陶珠 (*inasi*) を入れた檳榔子を供えることも忘れてはならない。檳榔子を供える際、通常の死霊には陶珠を、悪しき死霊には鉄片 (*tinar*) を入れるというのが決まりである。雨乞いの場合、いずれの目的地も溪谷や川の近くであるので、特に、谷川に落ちたり、川に流されて亡くなった死者たちに対して、鉄片を入れた檳榔子を供える。こうして死霊たちが邪魔することなく、雨乞いが円滑に行われるように祈るのである。

### ⑤ 祈願

続いて水源に向かっての祈願が行われる。まずは諸神霊に対して陶珠 (*inasi*) を入れた檳榔子を地面上に配置する。おもにアドックのカルマハンの祭主あるいは首長の手で行われ、背後からトゥマララマオたちが呪文を唱えることもあった。トゥマララマオのシズコ (1928年生まれ) の記憶では、右から順に、土地神 (*miHadup*)、天の神 (*itas*)、雨を司る祖先 (*temuwamuwan mitupa kana Hudal*) の3神霊に対し、それぞれ檳榔子5個ずつを供えたという。

現首長のハコ (1943年生まれ) が記憶する呪文の内容は以下のようなものである<sup>(6)</sup>。

*inu na kani (RuvooHan) na temuwamuwan, inmu na temuwamuwan mitupa kana maHasum kana nay, mitupa kana Hudal, inu na temuwamuwan, maHarum naniyam akan, dua mi kidadamana kiamia da Hudal, kanmu na temuwamuwan kana Hudal, paseveR naniyam akan, inu na mitupa kana Hudal, mitupa kana maHasum na nay, vurayay mi da Hudal, paseveR naniyam akan, vurayay naniyam akan, nukala Hamian kadu naniyam pualisin kanmu na temuwamuwan*

「ここ (ルヴォアハン) の祖先であるあなた。あなたたち泉 (maHasum) を司る祖先、雨を守る祖先よ。私たちの作物が枯れている。私たちは来た。同情して下さい。私たちに雨を下さい。雨を司るあなたたち祖先よ。私たちの作物を成長させて下さい。雨を司る祖先よ。泉を司る祖先よ。私たちに雨を下さい。私たちの作物 (akan) を成長させて下さい。私たちの作物を奇麗にして下さい。そうすれば収穫祭 (Hamian) の時に、あなたたち祖先に差し上げる分け前 (alisin) があります」

これは、最初に訪ねるルヴォアハンにおいて唱える呪文である。行き先に応じて、(RuvooHan) の部分を (Aranum) (eving) (taHiLan) などに変えるが、他は同じ呪文を各地で繰り返すことになる。

なお、トゥマララマオのシズコによれば、雨乞いの呪文の中では、泉 (maHasum) を「pinasum pinadun pinaligadun pinarisarus na mavulvul」と呼ぶという。mavulvul は「湧き出す」という意味だが、初めの4語はいずれも「泉」を意味する同義語で、少なくとも現在ではトゥマララマオのみが知る言葉である。トゥマララマオの呪文では古語とされる同義語が2語乃至4語繰り返されるのである。川 (didanuman) については「kaidagan kadanuman」とやはり同義語が繰り返される。男性首長の呪文が散文的であるのに対し、女性トゥマララマオたちのそれはつねに韻文体で唱えられる。

ちなみに、黒沢隆朝らによる1943年の調査によれば、同じプユマの知本社 (カティプル村) と卑南社 (プユマ村) の「雨乞いの歌」が記録されている [黒沢1973: 206, 209, 217, 228, 222, 230]。ただし、前者については、「大正7, 8年ごろの新作である」という [同: 206]。カサヴァカン村においては、少なくとも筆者の調査の範囲では、雨乞いの歌の存在は確認されなかった。

## ⑥ 水を汲み掛け合う

先の、④ヴィニリンと⑤祈願はトゥマララマオや祭主、首長のみで行われ、その間、他の参加者たちは休んでいるが、祈願が済むと、参加者たち、とくに若者たちは、竹筒に水を汲んでから振り回し、互いの身体に水を掛け合った [写真8]。その際、「HudaL! HudaL!」(雨よ! 雨よ!) と叫び、男性は大声で「o:y! o:y!」と叫び声を上げた。なお、後述するトゥヌムの海岸を訪ねた日には、波打ち際に行って、やはり「HudaL! HudaL!」と叫びながら波を掛け合ったという。プユマ社会では年長者に対する尊敬の念が強く、とくに男性は年長者へ徹底して服従しなければならなかった。にもかかわらず、雨乞いの場面では、年少者が年長者に、あるいは下位階級者が上位階級者に水を掛けることが許され、掛けられた側も「o:y! o:y!」と叫び、むしろ喜んだという。筆者の問いに対し、

口述者たちは、「水を掛けられると嬉しかった」と語っている。なお、雨乞いにおいては、参加者たちは互いに *raip* と呼び合っていた。いわば同僚といった意味である。日常の相互の呼びかけには、性別、世代、年齢、地位、親族関係の有無等によって細分された呼称が使用されるが、雨乞いにおいては、それらを見捨てた単一の呼称が使用されたのである。

昼食の時間になると各自が弁当を広げ、さらにその土地の草花で被り物を編み、すでに干涸びたものと交換した。さらに水を掛け合ってから帰路につくが、びしょ濡れになっていても、暑いので服はすぐに乾いたという。



[写真8] カティブル(知本)村で再現された雨乞い(1998年8月)。竹筒から水を撒いている

### ⑦ 帰村

その日の目的地からの帰路は往路と同じ道を通り、やはり駆け足であった。走りながら、竹筒に汲んだ水を掛け合った。目的地が遠ければ集落への帰還は夕刻になった。揃って集会所に到着すると、翌日の目的地を確認してから解散となる。なお、その日に雨が降り出しても、雨乞いを中止することはないばかりか、予定した目的地すべてを必ず廻らなければならなかった。なぜならば、雨乞いは *parisian*、すなわち儀礼的の意味が大きいからだという。興味深いことに、口述者たちはみな、すべての目的地を廻るうちに必ず雨が降ったと語っている。

さて、集会所での解散後も雨のカルマハンの祭主と何人かのトゥマラマオたち、そして首長にはまだなすべきこと(⑧、⑨)があり、それぞれカルマハンあるいは首長家に向かった。参加者たちは、みな身体が相当疲れているが、牛飼いなどの仕事に出かける者もいたし、申し合わせて集会所に残って酒を飲む者も少なくなかった。割り勘で酒と小魚の干物(*hipo*)などを買って、酒を飲みながら冗談にあけくれた。ある口述者は「酒を飲まないで雨乞いはおもしろくない」と語っている。

### ⑧ 再び雨乞いのカルマハンにて

朝、最初の儀礼的手続きが行われたアドックのカルマハンでは、祭主が、持ち帰った水を祭屋(壺ではない)に掛けた。それから呪文を唱えたが、その内容は記憶されていない。アルカルマンのカルマハンでも祭主が石に水をかけて雨を求めた。

### ⑨ 蟹による雨乞い

現首長のハコによれば、彼の父であり先代首長のアハダウ(1906-1978)は、蟹を用いた雨乞いを行っていたという。1960年前後の記憶である。雨乞いの初日には、祖先の発祥地ルヴォアハンを訪ねるのが決まりであった。ルヴォアハンには小さな泉しかな

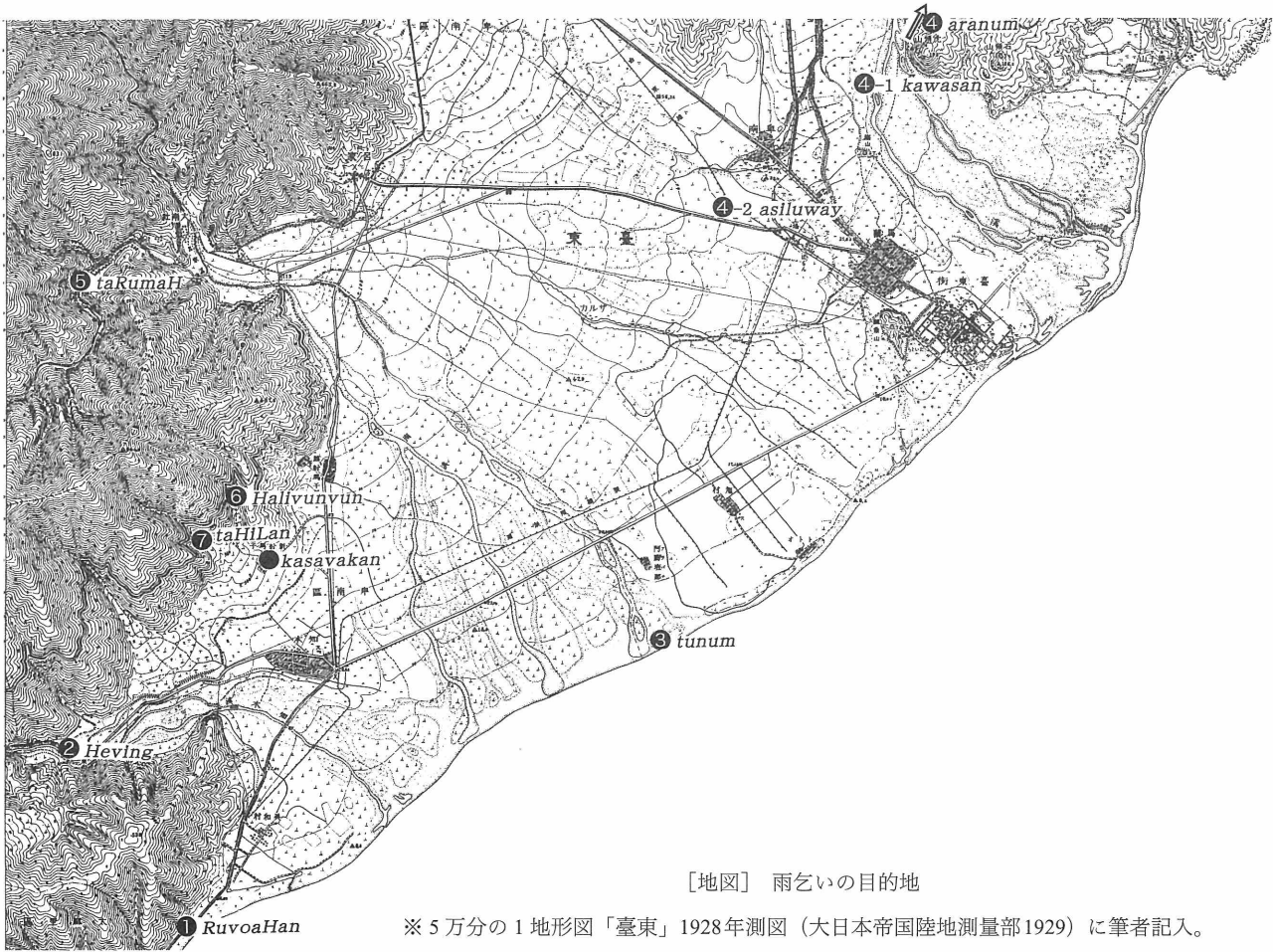
いが、ここで祈願してから、さらに南にやや進んだティアドゥン (*tiadung*) という場所に移動する。ここには泉があり、その水を汲んで掛け合った。ティアドゥンとは、そこにクワズイモ (*tiadung*) が沢山自生していることから名付けられた地名である。先代首長は雨乞いに赴いた際、ここでサワガニ (*ringnaH*) を探してクワズイモの葉で包んで持ち帰っていた。帰宅すると、自宅の炊事場に置かれた水甕 (*shukung*)<sup>(7)</sup>の脇に、葉に包んだままのサワガニを置いたという。その際、「この水が足りないから、あそこの水を貸して下さい。雲を出して下さい。雨になるように」といった呪文を唱えたという。蟹は腹の所から水を出すので雨乞いに用いるのだという。なお、「蟹は雨を探す」といわれ、種類を問わず雨の予測に用いられる。蟹が歩きながら唾 (*yumuluH*) を沢山出すと雨が降る、あるいは激しくなるといわれている。なお、サワガニやモクズガニは好んで食用にされるが、調理する前に家の中で逃げ出すことがある。こういう時には、きまって水甕の周囲の土を掘って逃げようとするという。涼しく湿度があるからであろうが、蟹のこうした性質が雨乞いに結び付けられたのであろう<sup>(8)</sup>。

#### IV 目的地

雨乞いには水を求めて何か所かの水源 (*lakad*) あるいは泉 (*maHasum*) を訪ねる必要がある。その行き先についてこれまで16名の村人たちに問うたが、その答えはまちまちであった。しかも、複数の村人が同席するなか同じ質問を行うと、それぞれの回答に対して他の口述者が、互いに「そうではない」とか「それは知らない」と指摘したり、さらに当人不在の場で筆者に対し「あれは嘘だよ」と批判する者もいた。回答があまりにも食い違うので、当初筆者は当惑したが、先述のように、雨乞いの参加者は家族の中から交代で、全期間を通じて一軒から最低一人が参加すればよいのだった。それゆえ、個人ごとに記憶が異なるのは当然である。記憶以前に実際の行き先が人によって異なっていたのである。とはいえ、初日の行き先がルヴォアハンであることは彼らの記憶の一致するところで、さらに大方の記憶では、翌日がエヴィンであった。年長者が挙げる目的地の数は比較的多く、若い口述者ほどその数が少なくなるという傾向があり、時代差の存在が予想される。参加回数の多い複数の年長者からの聞き取りを総合すると、目的地は、ルヴォアハン (祖先発祥地)、エヴィン (知本温泉の水門)、トゥヌム (利嘉溪河口付近の泉)、アラヌム (都蘭山)、タルマ (大南の発電所)、アリヴンヴン (集落の水源の一つ)、タイダン (集落の水源の一つ) の7か所ということになる。

口述者の中でも特に参加回数の多いシズコ (1928年生まれ) の記憶によれば、これら7か所を毎日一か所ずつ一週間かけて廻ったという。彼女の記憶を整理すると目的地の順序はおおよそ次のようになる。

- ①ルヴォアハン、②エヴィン、③トゥヌム、④アラヌム、⑤タルマ、
- ⑥アリヴンヴン、⑦タイダン



【地図】 雨乞いの目的地

※ 5 万分の 1 地形図「臺東」1928 年測図（大日本帝国陸地測量部 1929）に筆者記入。

ただし、各目的地までの距離や道の勾配は異なるので、二日目以降の行き先は、前日の帰村後に疲れ具合を勘案して主導者たちの相談により変更することもあった。さらに時代差もあり、時とともに行き先は減り、期間も短縮されたようである。

1948年生まれのアツウは14歳で最初に参加してから18歳で村最後の雨乞い（1965年）を行うまでの間、計5回雨乞いに参加している。しかも家族が忙しかったので、毎回全日参加しているという。彼女の記憶は鮮明であるが、1961年の彼女にとっての初めての雨乞いの行き先と日程は、①ルヴォアハン、②トゥヌム、③アラヌム（実際にはカワサン：台東大橋）、④タルマ、の4か所を1日1か所、計4日間であった。しかし、1962年から1965年までの4回は、初日に①ルヴォアハン、2日目に②トゥヌムと③アラヌム（実際にはアシルワイ）の2か所を廻り、3日目に④タルマ、という3日間の雨乞いだったという。シズコたちの時代の一週間が3日間に短縮されている。

ここで往年の目的地各地を概観しておきたい。なお、[地図]は、1928年測量の地形図に各目的地の位置を記入したものである。ただし、現在の地形はいくぶん変化している。特に河川は氾濫や治水工事により流路がかなり変化している。

#### ① ルヴォアハン (RuvoaHan) [写真9]

雨乞いの最初の目的地となるルヴォアハン（カサヴァカン村（新射馬干）から南に約7kmの距離、太麻里郷三和の海岸部に位置し、海岸と丘陵とが接する地形となっている。RuvoaHanとは「発祥地」という意味のプユマ語であり、カサヴァカン村をはじめいくつかのプユマの集落の伝承では、ルヴォアハンの石が割れてそこから祖先が誕生したと伝えられる。先述の、雨に関するカルマハンの一つであるアルカルマンの祭屋に祀られる石は、その時の片割れであるという。



[写真9] 雨乞いの最初の目的地。祖先発祥地ルヴォアハン

ルヴォアハンは、雨乞い以外にも、いくつかの儀礼で遥拝の対象となっている。夏の粟、冬の稲、それぞれの新穀を祭屋に捧げるデミラツ儀礼において最初に遥拝されるのが、集落南方のルヴォアハンであったし [蛸島1998：160-164]、トゥマララマオの成巫儀礼においても同様にルヴォアハンを遥拝している [蛸島2002：260]。ルヴォアハンには様々な神秘的な伝承が語り伝えられているが [蛸島2007：78-87]、ルヴォアハンの丘の上の方には、不思議な泉あるいは水甕があったという。その水甕には次のような伝説がある。

【伝説1】昔、ルヴォアハンに二人の幼いキョウダイがいたが両親が亡くなり、食べ物もなく、

村人たちからいじめられていた。泣き続けていると、亡き両親が現れ、ダドゥムン（ミフウズラ）を子供たちに与えた。親の言う通りに、その小鳥を鳴かしてみると米が出てきた。水甕に入れて鳴かせると水が出てきた。ある時、二、三か月間雨が降らなかったが、そのキョウダイだけは水があった。ルヴォアハンにはその水甕があるそうだ。それは大昔からの水。(1935年生まれのサブロ談)

雨乞いに際しては、その神秘的な水甕から水を汲んだともいう。しかしながら、斜面を登り草叢に分け入って水を汲むのは首長と雨乞いのカルマハンの祭主のみだった。他の村人たちは道端で待機しており水甕を見る機会はなかったという [蛸島2007: 83,85]。筆者の知る限り、実際にこの水甕を見たという村人は存命しないようである。水甕の伝承に加え、ルヴォアハンの丘陵の上の方には小さな泉 (*maHasum*) があり、雨乞いの際にはそこからも水を汲んだという。しかし、水量が非常に少なく、後に漢人が畑にしたのか今では泉は消えてしまったという。

アルカルマンの女性祭主のイワ (1921年生) には次のような経験があるという。

ある年、皆が雨乞いに行ったが、私は出産直後だったので参加しなかった。皆でルヴォアハンの水を捜したが見付からなかったそうだ。妹の夫が「ルヴォアハンの水が見付からなかったので、あなたが捜しなさい」と私を呼びに来た。自転車に乗ってルヴォアハンに行くと、私を前に年寄りが「今、水を捜してるから、見付けるようにしなさい」と呪文を唱えた。私が捜すと、漢人の畑のところで、水甕もないのに水だけ濡れているのを見付けることができた。

このようにルヴォアハンの泉は非常に小さく、水を汲むのは容易ではなかったようである。ここで祭主たちが儀礼を終えると、道端で待機していた一行は、ルヴォアハンから200mほど南のティアダウンという場所に移動する。ここには比較的大きな泉があり、ここで水を汲み、互いに掛け合い、そして集落に持ち帰った。

ルヴォアハンの海岸には、村や畑、また山では見ることのない珍しい植物が自生していた。なかでも *kavuRasiRasi* (ゲンバイヒルガオ) は大変美しくかつ丈夫であるので、皆揃ってこれを環状に編み被り物にした。

## ② エヴィン (*Heving*) [写真10]

初日のルヴォアハン以降の目的地は固定されてはいないが、2日目にはエヴィンに行くことが多かった。エヴィン (*Heving*) は「温泉」のことで、具体的にはカサヴァカン村から南西に約4.5kmの知本温泉及びその一帯の地名でもある。知本溪の右岸に温泉地が開かれているが、その中心部の北側の中州 (現在は知本圳親水公園が整備さ



[写真10] エヴィン (知本温泉) の用水路の水門の上流側。ここで雨乞いを行った



れている)を挟み、知本溪左岸側からカティプル村及びカサヴァカン村方面への用水路(*kari*)が引かれている。雨乞いは、日本統治時代に建設された、まさにその水門(*suimon*)を目の前にした上流側で行われていた。

③ トウヌム (*tunum*) [写真11]

*tunum* は、利嘉溪の河口東側の海岸部、現在のゴミ埋立地付近の地名であり、カサヴァカン村の東南東約6kmの位置にある。*tunum*とは、「沈む」という意味の動詞*mutunum*に基づき、「底なし沼」を意味する地形名でもある。同様な地形は別名を*vunuvunugan*ともいい、牛や人間が本当に沈んでしまい、地形を見誤ると危険であった。現在はずいぶん地形が変わったが、かつて、ここには小さな池があり、底の方から利嘉溪の伏流水と考えられる泉が沸き出し、旱魃でも枯れることはなかった。ここトウヌムで雨乞いの祈願を行い、水を汲んで掛け合った。さらに若い者を中心に波打ち際に行き、波がくると、それを浴びたり、掛け合ったりしたという。



[写真11] トウヌム(利嘉溪の河口東側の海岸部)。地形は変化している

なお、この池には大きな蛇(*unan*)あるいは竜(*tuoHtuoH*)が棲んでいたという伝説があり、一部の村人はこの地をトウヌムではなく*tuoHtuoH*と呼んでいる。1927年生まれの子はここを舞台とする次のような伝説を記憶している。

[伝説2] 昔、トウヌムの池で洗濯をしていた娘が消えてしまった。兄が探しにいった。妹は確かに水の中にいると思い、長い竹で探すと大きな蛇が出てきた。その蛇を刀で斬りつけるとキャンという音がした。それは腹の中の妹の腕輪に当たった音だった。娘は蛇に咬まれて腹の中で死んでいた。

④ アラヌム (*aranum*) [写真12]

アラヌム(*aranum*:都蘭山)は南北175kmに及ぶ海岸山脈のほぼ南端に位置する標高1190mの秀麗な山である。カサヴァカン村の北東、頂上までの距離24kmに位置するが、同村の民俗方位では、集落から見た海岸を「東」(*raud*)とし、自然方位との間には時計方向に約45度の偏差がある。従ってアラヌムは集落の「北」(*Hami*)に位置することになり「北」の指標となっている。この山は、伝説上の祖先3兄妹がかつて居住した場所でもあり、聖地の一つで



[写真12] アラヌム(都蘭山:標高1190m)

ある。先述のデミラツ儀礼やトゥマララマオの成巫儀礼においてもルヴォアハンと同様に人々はアラヌムを遥拝している [蛸島1997: 160-164, 2002: 260]。

雨乞いの際にもこの「アラヌム（都蘭山）を訪ねる」ものという。しかしながら実際に24kmも先のこの山に登拝する訳ではない。その手前の卑南溪下流域のカワサンにおいて、あるいは卑南溪からの用水路のあるアシルワイからアラヌムを遥拝するのである。

#### ④-1 カワサン (*kawasan*)

カワサンは卑南溪下流域の台東大橋周辺をさす地名である。ここからアラヌム（都蘭山）山頂までの距離は約13kmで、その秀麗な山容がより際立ってくる。ここカワサンの河原でアラヌムを遥拝して雨乞いが行われた。その際、呪文ではアラヌムの名を語り、アラヌムから祖先を招いたという。具体的な記憶としては、1948年生まれのアツウは1961年に一度だけカワサンを訪ね、台東大橋の右岸南側のたもとで雨乞いを行ったという。台東大橋は卑南溪を跨ぎ卑南と虎頭山方面とを結ぶ橋で1933年に最初の橋が完工している。ここでの雨乞いには、カサヴァカン村から旭村方面を通して台東の市街地を超え、卑南溪を遡ったが、往復30kmを超える行程であった。なお、カワサンをめぐっては次のような伝説が伝えられている。

**【伝説3】**昔、ルヴォアハンの首長が海岸に流れ着いた箱を見つけた。開けてみると卑南（プユマ村）から流された美しい娘がいたが、陰部に歯が生えていた。それを削って、二人は結婚して三人の子供が生まれた。子供たちは卑南にいる祖母を訪ねたが、冷たくあしらわれた。子供たちはカワサンにパラクワン（集会所）を建てた。パラクワンを建てた時にはパリシ（儀礼）を行わなくてはならないが、パリシの済む前に、*amaa*（父あるいはその兄弟）が見にきたので、弟の方がその*amaa*を殺してしまった。すると、鳥が垣根に飛んできて、「キョンを捕まえてパリシしないとイケない」と教えたので、その通りにした。その後、ある時、妹が洗濯に行ったが、大きな蛇に食べられてしまった。兄が蛇を切って妹を助け出した。ある時、妹が近くの*amis*（アミ族）の畑からサトウキビを盗んだのを見つかり捕えられた。妹は蛇など汚いものを食べさせられた。兄二人は凧を使って妹を助けたが、妹は食べていた汚いものをカワヤンで吐き出した。吐き出した悪い物が石になって、今もカワサンの（台東）大橋の所に残っている。

この話は1916年生まれのウクサンが1990年8月14日に語ってくれたもので、カワヤンはパリシ（儀礼・禁忌）の場所である。ただし、同じくウクサンが1995年に同じ話を語った際には、パラクワンを建てた場所は「アラヌム」だった [蛸島2007: 82]。同一口述者が同話を複数回語る時、細部が異なることが少なくないが、この場合は、カワヤンとアラヌムが混同されたというよりも、カワヤンがアラヌムを代表するかのよう理解されていたものと想像される。雨乞いのために「カワヤンに行く」ことも、「アラヌムに行く」と表現されるのである。

なお、先のトゥヌムにおいても娘が蛇に食べられたという伝説が語られていた（[伝説2]）。生死の相違はあるが、雨乞いの舞台となる2つの場所で同様な伝説が語られて

いる点は興味深いものといえよう。

④-2 アシルワイ (*asiluway*) [写真13]

「アラヌムに行く」という、その実際の行き先はカワサンよりも手前のアシルワイ (*asiluway*: 台東市豊年里豊年付近) であることが多かった。隊列の先頭に立つ者が真面目な人だったらカワサンまで走ったのだともいう。*asiluway* の *asilu* とはアミ語及び東部プユマ集落の言葉で蜜柑を意味し、同地では蜜柑が沢山栽培されていたことに因んでの命名である。卑南溪から旭村



方面に水を引く用水路 (卑南大圳) がここアシルワイを通過しており、その水門付近で雨乞いを行ったのである。具体的には、省道9号線 (中興路三段) から北へ150mほどの水門であるが、カサヴァカン村から大南經由で9号線を通過して往復したという。ここで、アラヌムに向かい、アラヌムの祖先を招いて儀礼を行ってから水を掛け合った。

[写真13] アシルワイ (豊年) の卑南大圳の水門

⑤ タルマ (*taRumaH*) [写真14]

*taRumaH* は、カサヴァカン村の北約5 kmに位置するルカイ (魯凱族) の集落名、すなわち大南集落 (卑南郷東興村) の名称であるが、同集落及びその周辺地域も同名で呼ばれている。やや下流で利嘉溪に合流する大南溪がこの付近ではほぼ東西に流れているが、現大南集落から上流、すなわち西方約4 kmに日本時代に建設された大南発電所がある。正確な地名はピディダン (比利良) であるが、大方のカサヴァカン



村民はこの名を知らず、*taRumaH* と呼んでいる。雨乞いはこの発電所のダムの下で行われていた。ただし、アツウの記憶では1960年代の雨乞いでは、トゥマラマオたちはダムまで行ったが、他の人はなまけて下流の排水口付近で水を汲み、掛け合っていたという。

[写真14] 大南発電所のダム。この下 (左側の河原) で雨乞いを行った

⑥ アリヴンヴン (*Halivunvun*)

アリヴンヴンは集落の北約2.5 kmの地名であるとともに、そこを流れる小さな溪流 (*pariduan*) の名称でもある。カサヴァカン村の水道の水源地の一つであり、鉄管による水道が設けられる以前にも竹の樋を用いた簡易な水道が設置されていた。現在も集落のほぼ西半分の家庭の水道はアリヴンヴンの水に頼っている。さらに、個人的に塩化ビ



[写真15] アリヴンヴン。道路沿いのここで  
ヴィニリンをした

ニールのパイプを用いて畑に水を引く農家も少なくない。集落の北に接してジムジグットゥ (*jimujigut*) と呼ばれる川が流れているが、通常は涸谷である。アリヴンヴンを水源とする水は増水時には後述するタイダンからの水と合流してこの川に流れ込み、時に暴れ川となる。

雨乞いの後半にはアリヴンヴンの水源点を訪ねるが、距離は近くても勾配が大きく、とくに往路が苦しかった。比較的広い道が溪流に近付く場所 [写真15] で檳榔子を配置してヴィニリンしてから、谷を遡った。早魃の度合いによって、水源点の位置が変わるので、山深く進まなくてはいけない年もあった [写真16]。

アリヴンヴンには平地ではみかけないサザイサイ (全縁卷柏) が自生しており、これを編んで復路の被り物にした。雨乞いの目的地には往復同じ道を通るといわれているが、アリヴンヴンに関してはそうとは限らなかったようである。1935年生まれの子ネハンは、ある年の記憶として、集落→ *sinalikidan* → *saparawad* → *sakay* → *Halivunvun* → *marayas* → *karudus* → *padekam* → 集落の順を記憶している。

#### ⑦ タイダン (*taHiLan*) [写真17]

タイダン (*taHiLan*) は集落の北西約1.5kmの地名であるとともに、溪流の名称でもある。時に暴れ川となり土石流の危険も大きく、ここからジムジグットゥにかけて、現在はいくつかの砂防ダムが築かれている。雨乞いが行われていたのはその最上流の砂防ダムの上流側であった。ここには、ダムが築かれる以前、



[写真16]

アリヴンヴンの水源点 (2007年3月30日)。撮影時は早魃が長期化しており、涸谷をかなり遡った



[写真17]

タイダンの水源点。最上流の砂防ダムの上流側

大きな自然の石が横たわっており、小さな堰 (*idiHip*) となっていた。薪取りなどに近くに行った際にはそこが良い水汲み場になっていた。

ただし、ここに至る道の勾配はきつく、参加者の年齢や体力を考え、やや下流で雨乞いを行ったこともあった。なお、タイダンは雨乞いの対象となるとともに、暴れ川という側面が強い。村人たちは洪水を恐れ、毎年旧 8 月 3 日に漢人式の防災儀礼をやや下流で行っている。

## V 雨を止める

ここまで、カサヴァカン村の雨乞いについて記述してきたが、雨乞いの一方で、長雨が続いた場合にそれを止める儀礼もあった。目的は正反対ではあるが、両者には通じる面もある。例えば、先のアルカルマンのカルマハンは、雨乞いの拠点の一つでもあったが、むしろ雨を止めるカルマハンとして有名であった。ここでパカダリィツ (*paka-dariH*) と呼ばれる雨を止める儀礼に触れておくことにしたい。「(雨が) 止む」ことを *dariH* といい、*paka-dariH* とは「(雨を) 止める」の意味である。パカダリィツはパウダル (雨乞い) とは異なり、村民が揃って走ることはなく、雨のカルマハンの祭主や首長、あるいはトゥマララマオの長のみが儀礼を行っていた。

首長のハコによれば、雨が止まない場合も、やはり泉の所に行き、祖先に対し、「私たちは水が余っているから水を節約して小さくして下さい」と要求するという。

雨のカルマハンと呼ばれるアドックのカルマハンでは、先々代及び先代祭主がパカダリィツを行っていたという。トゥマララマオのシズコは先代祭主のアゴト (男性: 1927-1986) がそれを行うのを一度だけ見せてもらったという。アゴトは、蠟燭に火を点けて槍 (*vakunan*) の先に挿し、カルマハンの後ろの石垣の上に立ち、その槍を天に向かって投げ上げた。こうして雨を止めるのだという。ただし、アゴトは、シズコに対し、これは「女がすることは許されず男だけができる」と語ったという。

アルカルマンのカルマハンでもパカダリィツ儀礼が行われていた。祭主のイワ (1921 年生) 自身の記憶では、彼女が、23, 4 歳のころ、10月から12月まで雨が降り続き、稲刈りができずに困っていた。彼女は夢を見た。サイブ (系譜関係不明) という名前の婆さんが、「イワ、寒くないように上等の着物を着て、水甕の中に入りなさい」と語ったという。何故そんな夢を見たのか不思議に思い、年寄りに話すと、トゥマララマオの所に連れて行かれた。トゥマララマオは「あなたのカルマハンで今日パリシ (儀礼) をしよう。私は慣れているから心配はない。5, 6 名のトゥマララマオを集めて、夕方パリシしに行く」ということになった。白い小石と松の木 (ともに発火具として使用される) を火で炙り、檳榔子と共にカルマハンの前に供えた。それから、イワの祖先たち、ルヴォアハンそしてアラヌムの祖先たちに雨を止めるように祈った。半時間ほどしてルヴォアハンの方を見ると空が明るくなっていた。雨は止み、翌朝には稲刈りができたと

いう。

ちなみに、古野清人は卑南社（プユマ村）の儀礼について、「雨乞い（パカウダル）の行事はよく記憶されていない。祈晴（パカシダル）には全社から檳榔の皮を集めて盆（タカル）に入れて、変死者を捨てたアダダランの東方に捨てる。この道中に呪文を唱えると雨がやむという」儀礼内容を記述している〔古野1972(1943)：107〕。

## VI まとめと考察

以上、カサヴァカン村の雨乞いについて、その背景、参加者、儀礼内容、目的地等について記述し、参考までに、雨を止める儀礼にも目を向けた。ここで、以上の作業をまとめ、いくつかの考察を加えてみたい。

### 非日常性とコムニタス

〔グラフ1〕に見たように台東地方の乾期の雨量は極めて少なく、早魃はほぼ毎年のように常襲していた。しかも、それは主要作物であった粟の成長期と重なり、雨乞いはほぼ毎年開催され、村の年中行事といってもよい儀礼であった。日によっては、往復30kmを超えることもあり、比較的近い目的地であっても勾配のきつい山道を駆け足で登らなくてはならなかった。雨乞いは「きつかった」「苦しかった」というのが村人たち共通の偽らざる感想である。一方で、雨乞いが「おもしろかった」とか「楽しかった」という声も頻繁に耳にする。1935年生まれのシネハンは、「雨乞いは、みんなが揃っており、見るとたいへん奇麗。友達や同級生が一緒だととても嬉しい。水を掛け合うのも、花を編むのも楽しいし、海岸に行ったら遊んでくる。雨乞いは、おもしろい」と語っている。また、1948年生まれのアツウは「雨乞いはおもしろいよ。娘と青年が一緒。30何歳、20何歳の人もみんな一緒でおもしろいよ」と語っている。

この辺に、V. W. ターナーのいうコムニタス（*communitas*）が現出していたように考えられる。参加者たちは、揃いの衣装や被り物を着用し、男女長幼の別なく水を掛け合っていた。顔を覆う大きな被り物は日差しを遮るだけではなく仮面に類した機能をもつものと考えられる。そして、参加者たちは互いに *raip*（同僚）と呼び合っていた。プユマ社会では、通常呼称法は、性別、世代、年齢、地位、親族関係等によって細分されていた。こうした多種多様な呼称法は、構造内での役割確認の機能を備えていたと考えられる〔嶋島2003：574-575〕。一方、*raip* という呼称法は、主に *saraipan* という労働交換の集団内で使用され、そこでは兄弟姉妹間であっても *raip* と呼称し合っていた。雨乞いにおいても同様な呼称法が用いられ、参加者たちの性別、世代、年齢、地位、親族関係等が無視されたのである。こうして参加者たちは、同質、平等、匿名となり、さらに、通常は男性のみが使用する鉦（*tawdiHul*）が女性によっても使用されていた。これらは「全員を同じ身分に引き戻し」性差別を極小化するものといえよう〔ターナー1976(1969)：151〕。プユマ社会においては、男子年齢階梯制が発達し、生業における

性的分業もみられたが、雨乞いにおいては年齢と性別の境界が取り払われた、あるいは臙げになったようである。集落祭祀をはじめ集落規模の諸事項は、首長が掌握する男子集会所が管掌し、集落を構造化していたが、雨乞いに限っては男子集会所の管轄外であった。ターナーは、早魃をはじめ「集団的危機の行事はときとして、身分逆転の行事」であり [同：239]、「構造」ではなくコムニタスが立ち現れるのだという。カサヴァカン村の雨乞いも例外ではなかったといえよう。

### 青年の参加

雨乞いの参加者たちには、時代による変化が認められた。具体的には、かつては参加しなかったとされる *mevararisun* や *vangsaran*、すなわち青年たちが参加するようになったことである。その理由については、村の伝統的な男子集会所が1958年に取り壊され、青年たちが居場所を失い、それまでは管轄外であった雨乞いに参加するようになったという推測を先に示したが、さらに次のような背景も推測されよう。先の女性口述者は「雨乞いはおもしろいよ。娘と青年が一緒」と語っている。雨乞いは年頃の男女が接近する好機となったのではなからうか。かつてのカサヴァカン村の婚姻居住形態は妻方居住婚が主流であったが、集会所の崩壊期でもある1955年頃を境に夫方居住婚へと急速に移行している。しかも、漢人、特に退役軍人の進出により漢人男性とプユマ女性との結婚例が急増し、村の青年たちは配偶者を確保すべく村の娘たちへの関心をより高め、雨乞いに恋愛の機会を求めたという推測である。

### 神話・伝説と地理・水文学的知識

次に雨乞いの目的地について整理してみたい。雨乞いに向かう目的地は都合8か所ほどであった。このうち、①ルヴォアハンには水甕やカルマハンの石といった雨乞いの装置が伝えられていた。さらに、③トゥヌム、④アラヌム、④-1カワサンは、雨乞いに直接関係するとはいえないが、やはり神秘的な伝説を伴っていた。これらは儀礼の真正性、あるいは目的地の真正性の拠り所となっているかのようである。

*paHudal* (雨乞い) は *parisi* (儀礼) であったが、それは人々の民俗科学と密接不可分の関係にあるようである。8つの目的地は、卑南溪、利嘉溪、大南溪、知本溪という近郊の4大河川と集落の2か所の水源を網羅するもので、人々の優れた地理学的あるいは水文学的知識が反映しているものと考えられる。さらに、注目すべきなのは近代的建造物との関係である。②エヴィン、④-1カワサン、④-2アシルワイ、⑤タルマ、全8か所中の4か所では、水門や橋、ダムといった近代的建造物の目の前で雨乞いが行われていたのである。なお、⑦タイダンで雨乞いを行っていたのは現在の砂防ダムの地点であるが、このダムが築かれたのはごく最近、2000年のことであり、雨乞いの方が先行している。すなわち、カサヴァカン村の人々の河川土木的知識が近代的それを先取りしていたということにもなる。また、④-1カワサンでは1933年完工の台東大橋のたもとで行われていたが、伝説との関係から、こちらも雨乞いの方が先行していた可能性が

高い。これらを除く3か所に目を向けると、エヴィンとアシルワイではいずれも用水路の水門で、そしてタルマでは発電所のダムの付近で行われていた。水門もダムもプユマ語ではともに日本語に基づき *suimon* である。本来、雨乞いは、水源 (*lakad*) あるい泉 (*maHasum*) に行うべきものであった。水門はいわば手短かな水源であり、水稻栽培に比重を移した近代的農業においては用水路の水門は重要な水源であった。この辺に文化の連続性と柔軟性とを同時に認めることができるだろう。カサヴァカンの村人たちは雨乞いを通じて彼等の地理学的あるいは水文学的知識と神話・伝説とを結びつけ、さらにそこから近代的土木構造物との間に水路を結んだかのようなのである。

### 消滅の背景

辛いながらも楽しい雨乞いであったが、カサヴァカン村では1965年を最後に雨乞いは行われていない。ここで、その背景を考えてみたい。

第一に生業形態の変化が指摘されよう。具体的には主要作物が粟から水稻へと移行したことである。用水路の整備により水田をもつ農家は早魃となっても比較的安定した収穫を期待できるようになった。さらに、ポンプによる揚水設備が導入されると早魃は恐怖ではなくなってきた<sup>(9)</sup>。そして、自家消費作物から果物を中心とする換金作物へと作物が移行し、種類も多様となった。さらには、周辺の工場や観光地その他の賃金労働を始める者も増え、離農も進行している。農業のサイクルは多様化し、労働の共同性も欠けるようになり、労働交換の習慣や組織も衰退した。以上の諸点から早魃は少なくとも村全体の脅威や関心事ではなくなったのである。さらに、伝統に詳しい主導者たちが高齢化したこと、学校教育による知識の近代化、天気予報の普及、これらの諸要因が重なりあって、雨乞いを消滅させたものと考えられる。

### おわりに

以上、カサヴァカン村の雨乞いに関して記述を行い、簡単な考察を加えたが、プユマの人々の地理学、水文学、気象学的知識には非常に興味深いものがある。本来ならばそれらの理解と併行して雨乞いについて論じるべきであったが、現在のところ、調査が不十分である。他集落の雨乞いとの比較を含め、今後の課題にしたいと考える。

### 注

- (1) 正確には台東市の市街地(旧「台東街」)の雨量[陳正祥1961:1213]。
- (2) タウパスという名のその男性は竹占いも行っており、とくに女性トゥマララマオがあまり行わない、軍事や狩猟に関する儀礼をよく行っていたという。そうした差異のためか彼のことをトゥマララマオとは呼ばない口述者もいる。
- (3) 主要作物の一つであるサツマイモとの類似、早魃に耐える生命力が、グンバイヒルガオが被り物の素材に選ばれた理由であるかも知れないが、村人たち自身によるそのような説明



は耳にしていない。

- (4) パイワンの諸集落においては、首長家の宝物として壺が重要な意味をもつが、カサヴァカン村のカルマハンで壺を祀るのはこのカルマハンのみである。
- (5) 笠原政治はこのような走行方法を「環走」と呼んでいる。プユマの初鹿集落では儀礼的首狩の参加者が出迎えの年寄りや女たちとともに村に戻る際、「vaŋsaran は敵の逆襲から年寄りや女たちを守るために、独特な環走方式で村まで走り続けなければならない」という [笠原 1980 : 174-175]。
- (6) 呪文は勝手に唱えることはできないとされている。この呪文は夕刻、酒を祖先に分け、ハコと筆者も酒を少量飲みながら録音したものである。最初に、祖先に対し盃の酒を指先で弾き飛ばすようにするが、その際、「分からないところを教えてください」と祈願する。
- (7) *shukung* は高さ 1 m 弱の水壺で、漢人が作製したものを購入した。
- (8) サワガニはトゥマラムオの成巫儀礼にも使用されている [蛸島 2002 : 263]。
- (9) カサヴァカン村では動力式ポンプの導入以前に水車や龍骨車などの揚水施設は使用されなかった。

## 文 献

陳正祥

1961 『台湾地誌』下冊 南天書局

古野清人

1972 (1943) 「パナパナヤン族の農耕儀礼」『古野清人著作集』1 : 102-114 三一書房

笠原政治

1980 「台湾プユマ族の二つの祭祀」『黒潮の民族・文化・言語』黒潮文化の会編 150-182  
角川書店

黒沢隆朝

1973 『台湾高砂族の音楽』 雄山閣

ターナー、ヴィクター・W

1976 (1969) 『儀礼の過程』 富倉光雄訳 思索社

蛸島 直

1998 「プユマ族のデミラツ儀礼——カルマハン帰属原理の理解に向けて——」『愛知学院大学文学部紀要』27号 : 155-173

2000 「プユマ族カサヴァカン村の有力カルマハン(I)」『愛知学院大学文学部紀要』29号 : 85-102

2002 「プユマ族の成巫儀礼 : 写真資料」『愛知学院大学人間文化研究所紀要人間文化』17号 : 251-270

2003 「プユマの対人呼称法」塚田誠之編『民族の移動と文化の動態 : 中国周縁地域の歴史と現在』535-581 風響社

2007 「台湾先住民プユマの発祥地伝承——カサヴァカン村の調査から——」『愛知学院大学文学部紀要』36号 : 77-88

